

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

特集 ブナオ山観察舎

第35巻 第3号



ブナオ山観察舎

白山一里野温泉スキー場から、1.5kmほど白山スーパー林道に入ったところにあるブナオ山観察舎は、野生の哺乳類や鳥類が観察できる施設です。

野生の動物を自然のままに観察できる施設としては、日本で最初に造られた施設です。手取川の支流・尾添川左岸に位置する観察舎からは、対岸のブナオ（山毛櫨尾）山に生息している野生動物が自然に生活している姿を見ることが出来ます。

ブナオ山の山頂部は比較的なだらかな地形のブナの森ですが、観察舎から眺められる尾添川に沿った南西面は急な斜面で、雪崩がたびたび起るため樹木が生育できず、ナバタと呼ばれるシシウドやアザミなどが生育する高茎草原となっており、ここを餌場とするカモシカやニホンザルの自然の姿を観察する事が出来るのです。
(徳田 外治朗)



ブナオ山観察舎のキャラクター
かもちゃん

ある日のブナオ山観察舎



たくさんのお友達が来てくれました。
観察班とかんじき班に分かれていただきました。
(2階の望遠鏡は限りがありますので、大人数の場合は、班分けで対応させていただきます)



カモシカが見えますか？
(観察風景)



望遠鏡での観察のほか、いろいろな展示物で
学ぶこともできます。

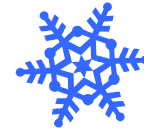


かんじきを履いて雪山を！
楽しい尻すべり！！





アカネズミでチュ！
 時々おじゃましてチュ！
 よろしくお願ひしまチュ！
 (新しく設けた、観察箱に現れたアカネズミ)



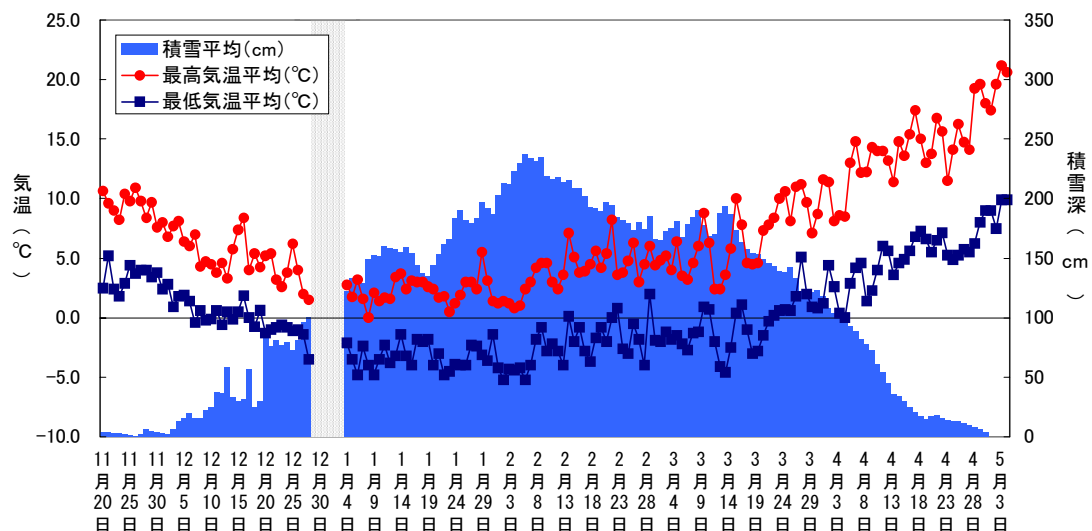
気温が低いのですが、窓ガラスの曇り防止のため暖房をあまり強く出来ません。暖かな服装でご来館下さい。



フナオ山観察舎の天候、気温、積雪

12月～3月中旬は、晴れの日は少なく、2002年度～2006年度までの5シーズンの平均では、50%以下ですが、3月下旬からは比較的天候が良くなります。観察舎周辺の最高気温と最低気温が最も低いのは1月から2月上旬で、最高気温でも-4℃と氷点下の日もあり、最低気温では-10℃ぐらいまで下がる日もあります。フナオ山観察舎では曇り止めもあって、あまり強い暖房は入っていませんので、この時期に来館される方は、十分な寒さ対策が必要です。

最近の5シーズンの平均で最も積雪があった日は、2月6日で237cmでしたが、2005年の豪雪の時の最大は414cm(2006年2月9日)でした。2006年は逆に極端に積雪の少ない年で、最高でも159cm(2007年2月2日)でした。



フナオ山観察舎の積雪、最高気温及び最低気温 (2002年度～2006年度の平均)

12月29日～1月3日は欠測期間

ブナオ山で見た野生のドラマ

伊澤 紘生 (帝京科学大学教授)



加賀禪定道尾根から見たブナオ山

白山一里野温泉スキー場からは、ブナオ山はお椀を伏せた形に見える。そのお椀の南面に、たてに真っすぐな目立つひび割れがある。オオノマの谷だ。

ブナオ山とのつき合いは40年にもなる。雪の積もった冬場が中心だ。ブナオ山観察舎が建つ前は道路の路肩に座り、尾添川を吹き上げる冷たい谷風に身を切られながらの観察だった。観察舎ができてからは、ストーブの温もりの中、備え付けの望遠鏡を借用した。そして、V字型に刻まれた尾添川をはさんで対岸、真正面にオオノマ谷を見ながら、ブナオ山の険しい南斜面で繰り広げられる野生のドラマをいくつも目の当たりにしてきた。

吹雪になると視界が閉ざされる。止むと一面の銀世界になる。日差しが戻ると雪崩が起こり、黒い地肌が出る。ブナオ山南斜面は冬じゅうこれを繰り返す。



中宮の出作り小屋前にて (1997年)

白山自然保護センター中宮展示館がアワ(表層雪崩)で破壊された翌年の冬は、外氏の出作り小屋を借用して調査を行った。右から2番目が筆者

ある夕方、オオノマ谷で突然大きな雪崩が発生した。周囲にいたサルたちがギャンと叫んでいっせいに跳ね飛ぶ。座って反すうしていたカモシカがむっくと起き上がる。後肢に力を入れ跳躍する。その瞬間、雪崩はカモシカを巻き込み、轟音を発して谷底へと一気に落ちる。一瞬のことで、巻き込まれたサルがいたかどうかまでは分からなかった。

その数年後のことだ。冬場では珍しく快晴の日が3日続き、4日目も朝日が雪面に照り返ってまぶしかった。オオノマ谷と尾添川の合流点より少し上流に堰堤があり、その尾添川対岸だけがやや平になっている。2頭のキツネが長い冬毛を金色に輝かせながら、いつとき、向かい合い垂直にジャンプし合って戯れる。うち1頭には尾がつけ根からない。これまでもよく見かけたキツネだ。そのあと2頭は斜面をゆっくり登って姿を消したが、堰堤まで下りてみたら、雪崩で死んだと思われるカモシカの死体があって、内臓は食べ尽されていた。

ちょっとモヤのかかった昼下がり、2羽のイヌワシが勇壮に舞う。ブナオ山上部の雪面は淡いブルー色だ。2羽はもつれ合うように、ら旋を描いて降下しては急上昇を繰り返す。それは繁殖に入る雄と雌の儀式なのだろうか。

その朝、紺青の空がブナオ山の輪郭を際立たせていた。ヤマドリのつがいがオオノマ谷の真下、雪崩で積もった雪の上で、寄り添って何かをついばんでいた。少し下流のズバイ壁の岩場からクマタカが飛び立つ。一回大きく輪を描く。そして翼をたたみ、次の瞬間、矢のごとくにヤマドリに突っ込む。同時に2羽のヤマドリが数回激しく羽ばたき、それからすうっと向いのスギ林に吸い込まれる。クマタカの襲撃は間一髪失敗に終る。

数年前、それまで全くいなかったイノシシがブナオ山一帯にも進出し始める。吹雪の2日間、1頭のイノシシがオオノマ谷右岸にある積雪の大きな裂け目の中にいて、ぬかるんだ土をほじくり返していた。吹雪のわずかな切れ目ごとに、望遠鏡に映るイノシシは鈍い鉛色だった。3日目に吹雪は止んで、そこにはもうイノシシはいなかった。

1960年代から1970年代にかけてのブナオ山南斜面は、上流は中ノ川の岩間温泉の先まで、下流は一里野スキー場の裏側の目附谷まで、長大な遊動域をもつタイコの群れと名付けたサルの群れが、冬場ももっとも頻繁に利用する地域だった。その後タイコの群れは徐々に数を増やして分裂し、さらに下流へと進出していく。30頭ほどの分裂群、タイコB群がそれまでの遊動域を引き継ぐ。タイコ



オオノマ谷で発生した雪崩

B群も同様に数を増やして2回分裂し、そのたびに遊動域を二分する。そして現在、35頭ほどの分裂群、タイコB2-2群がブナオ山南斜面一帯を引き継いでいる。この群れに3年前、白猿が生まれた。

ブナオ山南斜面で展開されるこのような生と死と躍動のドラマに、おそらく幕が降りることは無いだろう。



白猿(右)とその母親(左)

伊澤 紘生

1939年生まれ。理学博士。国内、海外のサルなど野生哺乳類の生態や保全について調査研究を行う。白山では1968年以来、継続してニホンザルの生態について調査している。

ブナオ山観察舎で

田中 稔

ズバイ壁の紅葉がまばらに残る11月下旬、交通混雑の白山スーパー林道が山峡本来の静寂な空気に覆われる時、ブナオ山観察舎が開館となる。開館作業は4、5年に1回くらい、積雪の中の作業となる。14年間も通ったことが懐かしい。現在は2人勤務の日もあるが以前は何時も1人の勤務だった。私は下家智見さんの後任として1992年4月から勤務し、相方は殊才実さんだった。当時は電気や水道、暖房のストーブも一切無く、



かんじきハイキングで先導する筆者

ひたすら厚着で観察指導用務に就いていた。現在の観察舎の設備は本当に充実した。1999年からは『ブナオ山観察舎だより』を発刊することになり、私は「ちょっこばなし」というタイトルのコラムや他に白山自然保護センターの普及誌『はくさん』に「あんな話こんな話」と云う駄文を記していたが、折々の動植物との出会いの中から無理に引出したような事柄だったかも知れない。このたびブナオ山観察舎特集号に執筆依頼をいただいたのでブナオ山の野生動物達や原風景から気付かされた一片を記したい。



動物の足跡（ノウサギ）

尾添川の上流へと車を進めて白山市瀬戸集落を過ぎると、スノーシェッドの出入りと急カーブでハンドルさばきの忙しさに峡谷美などふっとんでしまうが、東荒谷口・目附谷口付近の雪に包まれた峡谷の景観は素晴らしく、日の当たる場所となるのか、山里の過疎と共に静かに消えてしまうのかなどと思いつつ白山一里野温泉スキー場を通り過ぎ、観察舎入口付近の林道沿いに車を駐車する。積雪があれば林道からの取り付け道はカモシカ、テン、キツネ、ノウサギ、リス、サルなどの動物の足跡がよく見られた。また、観察舎の入口や観察舎の隣のトイレ棟の入口ではテン、ノウサギ、キツネ、ヤマドリなどの糞が落ちていることもあった。観察舎の中に入り、越冬中のカメムシに尻をぶっかけられないように付き合うことが本当の動物達とのふれあいの一歩であった。またサシガメ、テントウムシ、ホタルガなどもたくさんいた。

2 階の観察室に大型の望遠鏡・双眼鏡があり、ブナオ山斜面に沿って動かせば、その視野にカモシカ、サル、イノシシ、キツネ、クマなどの動物が見られた。また多い年はスズメバチの巣が 10 個以上もあった。天気のよい日はイヌワシ、クマタカの飛翔もときどき見られたが根気のいる作業であった。観察舎付近の常連の鳥達はカケス、ジョウビタキ、ミソサザイやアオゲラであった。ヌルデ、リョウブ、コシアブラの実をついばみに来るアオゲラの観察舎壁板へのドラミングは強烈でよく脳震とうを起ささないものだった。また 1 日に 1、2 回ずつ訪れるエナガ、シジュウカラ、ヒガラ、ヤマガラ、コガラ、コゲラなどの混成群のツーピー野外四重奏のアーティストも楽しみであった。

クマ対カモシカ、カモシカ対イノシシ、カモシカ対サル、カモシカ対テン、キツネ対イヌワシ、タヌキ対クマタカなど相互のかかわり合いは興味深く、観察の日々を重ねることができた。動物達には、一言でいえば「なわばり」と片付けられることかもしれないが、一瞬にして敵と味方を知ってしまう能力や空気を読むことができることから、平静・警戒・干渉行動・闘いといった生活空間に距離を持っていると感じられた。野生動物達のくらしぶりを眺めながら、私達も生きものとして生活の基盤をどう持って行けばいいのか考えさせられることがたびたびあった。無言で一切を語ってはくれないが二百年余と思われる樹齢のブナ、トチノキ、ミズナラ、カツラなどからなる老木の稜線から白山おろしの風が耳たぶにそっとさわって行った。

今年の春、屋久島の山中に屋久杉を訪ねた折や、ひとりでいる観察舎での雰囲気。また、平泉寺白山神社のスギ並木や白山中居神社の老木をくぐった時、また長滝白山神社境内や白山比咩神社の表参道を歩く時に、老大木の並木などが語りかけてくるものは何だったのだろうか。樹齢の年輪が



アオゲラ

知覚をゆさぶるのであろうか、ただ頭がさがるのみであった。ブナオ山観察舎の開館時は各種野外活動のシーズンオフでありマスコミの注目もあり地元放送局や全国区の放送局のテレビ放映のほか新聞社や雑誌でも紹介していただき感謝している。

冬山の楽しさの一つとして「かんじきハイキング」を試みたところ、皆様に喜んでいただき定着した。「いしかわ自然学校」と共に活動が続きますようお祈りしたい。



カモシカ

よく見ると左右の角に欠損部があるため、個体識別が可能。

田中 稔

1931 年生まれ。1992 年度から 2005 年度までの 14 年間、白山自然保護センターに勤務。この間、冬場はブナオ山観察舎にて自然解説等の業務にあたる。

ブナオ山の代表的な動物と 観察のポイント

上馬 康生・野上 達也 (白山自然保護センター)

2002年度シーズン(2002年11月20日～2003年5月5日)～2006年度シーズン(2006年11月20日～2007年5月5日)の5シーズン間のブナオ山観察舎の観察記録をまとめ、旬別にどのぐらいの確率で動物が見られるかを計算しました(表1)。1日のうちわずかでも確認された場合、観察日数1として、開館日数で割って計算しました(ただし、動物は、ほとんど1日中見られることは少なく、限られた時間のみしか見られないことがほとんどです)。

表を参考に観察したい動物の見られる時期に合わせてご来館されればよいと思います。ただし、それぞれの動物の観察確率は年によって異なることがあります。最新の情報はブナオ山観察舎まで問合せるか、白山自然保護センターのホームページの中にブナオ山観察舎の観察情報として、ほぼ10日ごとに更新していますので参考にしてください。ホームページには、携帯電話からもアクセスできるページも用意しています。バーコード読取機能を搭載したカメラ付き携帯電話をお使いの方は、下の二次元バーコードを撮影して簡単にアクセスすることができます。

ブナオ山観察舎ホームページ パソコン用 アドレス

<http://www.pref.ishikawa.jp/hakusan/bunao/index.htm>

ブナオ山観察舎ホームページ 携帯電話用 アドレス

<http://www.pref.ishikawa.jp/hakusan/i/bunao/index.htm>



ブナオ山観察舎では、最近の5シーズンで、哺乳類は8科10種、鳥類は22科48種が観察されました(表1)。開館以来ですと、ブナオ山観察舎で観察された哺乳類は9科12種、鳥類は28科69種で、イタチやオオワシなど哺乳類2科2種、鳥類13科21種は最近の5シーズンでは観察されていません。



いつでも見られるカモシカとサル

最近の5シーズンで最も確認された種はカモシカで、非常に高い確率(95.0%)で観察されています。次いでニホンザルの71.1%となっていました(表1)。

主な種類の特徴をみると、観察確率1位、2位のカモシカやサルのほか、シジュウカラやヒガラなどのカラ類は、シーズンを通して観察されています。一方、ウグイスやオオルリ等の小鳥類は4月～5月に観察される鳥で、観察確率10位のウグイスは、この期間だけみると30.5%の高い確率で観察されています。また、ツキノワグマは4月中旬から5月にかけて時々観察されています。ですからカモシカやサルはいつでも観察することができますが、小鳥類の観察は、春がもってこいの季節ということになります。

なお、ノウサギやテンの観察確率は、それぞれ0.4%、0.7%と低いものの、観察舎周辺では頻繁に足跡が残されており、観察舎の閉館している夜に訪れているのでしょう。

表1 ブナオ山観察舎で動物が観察できた確率（2002年度～2006年度、5年間の平均）

	11月			12月			1月			2月			3月			4月			～5/5	観察 日数	観察 確率	BEST10	
	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬					下旬
アナグマ																				1日	0.1%		
イノシシ			○	△			△	○	○	○	△	△	△							45日	5.6%		
キツネ				△		△	△	○	△	△	△	△								33日	4.1%		
タヌキ																△		△	△	4日	0.5%		
ツキノワグマ																		○	◎	◎	30日	3.7%	
カモシカ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	763日	95.0%	1位	
ニホンザル	◎	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	◎	◎		571日	71.1%	2位	
ノウサギ									△	△	△	△								3日	0.4%		
テン					△		△	△	△	△						△				6日	0.7%		
ニホンリス		△	△	△		△	△	△	△	△										9日	1.1%		
アオゲラ	◎	○	○	○	△	○	○	◎	○	△	△	○	○	○	△	△	△	△	123日	15.3%	8位		
アオサギ																		△		1日	0.1%		
アオジ																		△	△	2日	0.2%		
アオバト		△																		1日	0.1%		
アカゲラ	△			△					△	△	△		△	△	△	△	△	△	17日	2.1%			
アトリ	△	△																		3日	0.4%		
イカル						△			△								△	△	△	9日	1.1%		
イヌワシ	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	211日	26.3%	5位	
イワツバメ																	△	○	○	13日	1.6%		
ウグイス																	○	○	◎	●	54日	6.7%	10位
ウソ										△										2日	0.2%		
エナガ	△	△	△	△		△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	35日	4.4%			
オオアカゲラ				△																1日	0.1%		
オオルリ																		○	△	8日	1.0%		
オオタカ				△										△						2日	0.2%		
カケス	△	△	△	○	△	○	○	○	○	△	△	△	△	○	●	●	●	●	167日	20.8%	6位		
キジバト																	△	△	△	3日	0.4%		
キセキレイ																	△	△	△	5日	0.6%		
キビタキ																		△	△	3日	0.4%		
クマタカ	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	◎	○	○	○	△	○	○	○	○	142日	17.7%	7位		
クロツグミ																		△		1日	0.1%		
コガラ	△	△	△	△		△	△	△	△	△		△	△	△	△	△	△	△	38日	4.7%			
コゲラ		△	△				△	△	△	△		△	△	△	△	△	△	△	16日	2.0%			
ゴジュウカラ							△			△		△	△	△	△	△	△	△	9日	1.1%			
コルリ																	△			1日	0.1%		
サシバ																	○	○	○	22日	2.7%		
サンショウクイ																		△		1日	0.1%		
シジュウカラ	○	△	△	○		△	△	△	△	△		△	○	◎	○	○	△		82日	10.2%	9位		
ジョウビタキ	○	△	△		△	△	△								△	△	△		32日	4.0%			
ツミ														△		△	△		4日	0.5%			
トビ	△	△	△	△	○	△	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	238日	29.6%	4位	
ノスリ			△	△			△	△	△						△	△			11日	1.4%			
ノビタキ																		△	△	2日	0.2%		
ハシブトガラス	○	○	○	○	△	◎	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	265日	33.0%	3位	
ハヤブサ					△												△	△		3日	0.4%		
ヒガラ	△	△	△	△						△	△	△		△	○	△	△		24日	3.0%			
ヒヨドリ						△	△	△	△						△	△	△	○	○	26日	3.2%		
ベニマシコ	△																			1日	0.1%		
ホオジロ											△				○	○	◎	○		42日	5.2%		
マヒワ			△	△											△	△			5日	0.6%			
ミツサザイ	△		△			△				△	△				△	△	△		9日	1.1%			
メジロ																	△	△		6日	0.7%		
メボソムシクイ																	△	△		2日	0.2%		
ヤブサメ																	△	△		4日	0.5%		
ヤマガラ	△	△	△			△	△	△	△			△	△		△	○	○	△	32日	4.0%			
ヤマセミ															△	△			3日	0.4%			
ヤマドリ		△	△	△		△	△		△						△	△			14日	1.7%			
ルリビタキ								△												4日	0.5%		

観察できた確率は観察できた日数を期間中の開館日数で割り、それを5年間分（2002年度～2006年度）で平均して算出。結果は次の凡例で示す。

空欄：観察されず △：～10% ○：～25% ◎：～50% ●：～100%

(例) ある年の12月1日～10日の10日間で2日、その動物が観察されれば、2/10=20%。同様に他の4年間も求め、平均を出す。その結果、15.5%だった場合は○、30%となった場合は◎で表示する。

最近5年間では観察されなかった種

哺乳類：イタチ、ハクビシン

鳥類：アカハラ、アマツバメ、オオワシ、カッコウ、カワガラス、カワラヒワ、キクイタダキ、コサメビタキ、ジュウイチ、セグロセキレイ、センダイムシクイ、ツグミ、ツツドリ、ツバメ、ハイタカ、ハギマシコ、ハクセキレイ、ハリオアマツバメ、ブッポウソウ、ムクドリ、モズ

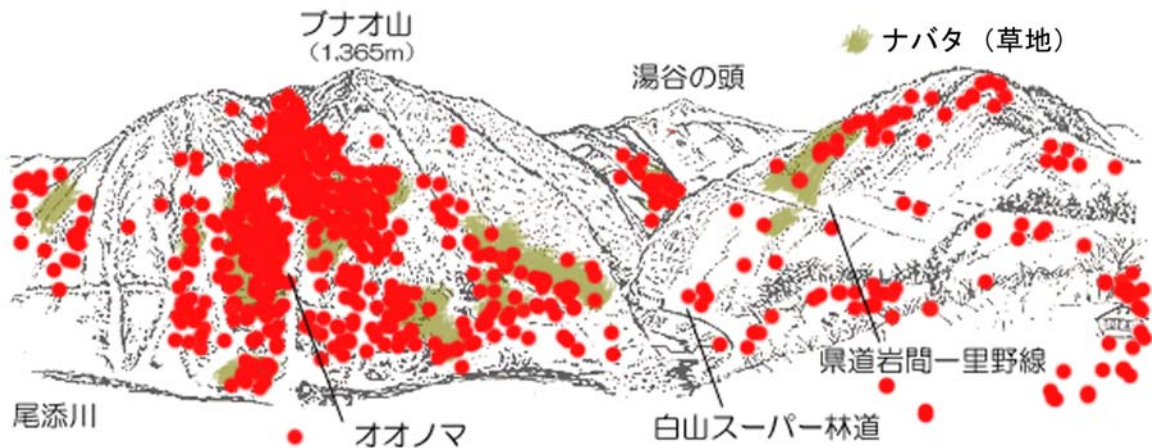


図1 ブナオ山観察舎からカモシカが観察された場所 (2006年11月20日～2007年5月5日)



カモシカ

ブナオ山で一番よく見ることができ、天候が悪く雪やガスで山が見えないとき以外は、どこかに見つかる動物です。クマやサルと違って、なわばりを持つので、お互いある程度距離をおいて生活しているのが普通です。雄は雄どうして雌は雌どうして縄張りを持ちます。5～6月ごろに生まれた子は次の春まで母親と一緒に行動するので、観察舎の開館中に2頭が長い間、一緒に近くにいて大小の区別がつけば親子と考えてよいでしょう。秋なら子がおっぱいをねだっているところを、春先なら親が子を追い払っているところを見ることができのかもしれませんが。また大きさがほぼ同じであれば雌雄の可能性が高いでしょう。3頭が一緒にいれば親子の組み合わせと考えられますがこのような例は少なく、また4頭以上が近くに一緒にいることはごく稀です。

ブナオ山で姿を見つけることができないときは、積雪があれば足跡をたどっていくと木の下などで横になっていることがあります。そして望遠鏡でよく見ると、あごを動かしていることが分かるかも知れません。カモシカはウシの仲間ですから、食べたものを口に返し、かみ直してまた呑みこむという反すう運動をしていることがよくあります。雪の多い季節は分散していますが、春になって草地が青くなってくると若草を求めて集まってくる傾向があるので、そのような場所を中心に探すのもポイントの一つです。また観察舎の周りを縄張りしているカモシカがいるので、時々すぐ近くに現われることもあります。これも新しい足跡を事前に見つけておくと、より見つかる可能性が高くなるでしょう。

近年、県内ではカモシカの分布地が低山や能登地域の山にも広がっていますが、どこでも数が増えているかというところではないようで、以前に数が多かったところで減少しているところがあります。ブナオ山はカモシカの生息密度調査の定点となっており、1986年以降5～6年おきに4回実施されていますが、1、2回目はともに約12頭/km²であったのが、3回目で6.4頭/km²、今年の4回目の調査で5.1頭/km²と減少傾向がみられます。3月から4月のよく見つかる季節に、ブナオ山の見える範囲に最大何頭のカモシカがいるかを数えてみませんか。4時間以上かけて重複のないように個体の動きを地図に時刻とともに記録しながら調査することが重要です。望遠鏡で体の各部分の色などで個体を識別して調査すると重複を防ぐことができます。職員は毎日のように見ており個体の特徴を知っているカモシカが何頭かいるので、聞いてみると参考になるでしょう。

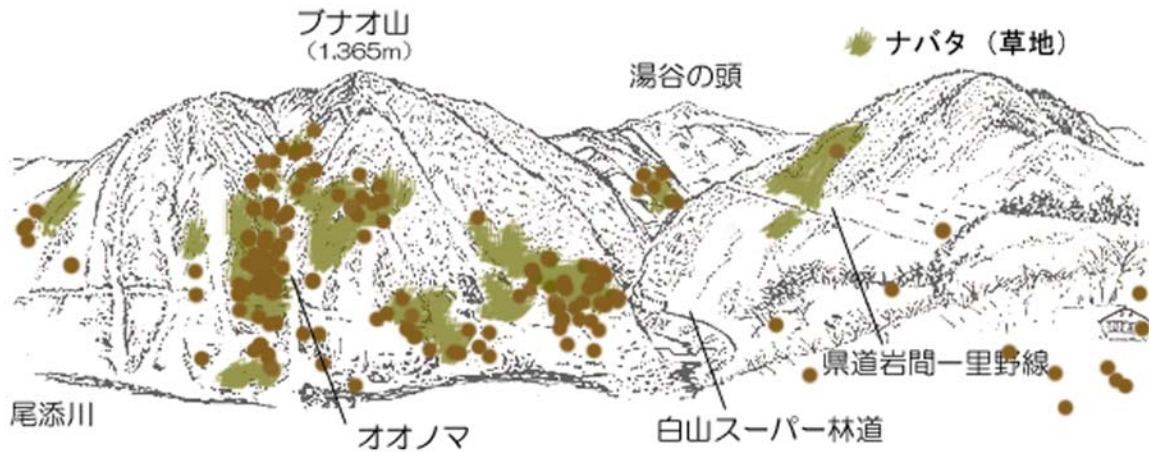


図2 ブナオ山観察舎からニホンザルが観察された場所（2006年11月20日～2007年5月5日）



ニホンザル

単独でいることもありますが、カモシカやクマと違って群れで生活するのが大きな特徴といえます。白山の石川県内にはサルの群れが約30いることが分かっており、研究者が名前を付けています。その中で観察舎周辺やブナオ山に見られるのは、タイコB2-1群、タイコB2-2群などです。カモシカにくらべると体が小さく、ブナオ山にいる単独の個体を見つけるのは困難ですが、群れでいる場合がほとんどなので動いていれば見つかるでしょう。雪のあるときは斜面の雪が崩れて地面が開いたところで秋に落ちた木の実を探したり、草の根を掘り出したりして食べていたり、木に登って芽を食べたり皮をかじったりしているのが見られます。観察舎の周辺にも時々姿を見せ、雪の上に親指が外側に開いたヒトの手形に似た足跡を残しています。

春になるとカモシカと同じように草地で芽吹いたばかりのいろいろな草の葉や花を食べています。ブナオ山にはオオノマと呼ばれる大きな谷の両側など急斜面に草地が多く、サルだけでなくカモシカにもクマにとっても春の食べ物をたくさん供給しています。子どもは4月から6月ごろに生まれ、はじめは母親の胸にしがみつき、やがて背に乗って移動します。近くで見ることができれば、大きさからアカンボウと1歳、2～3歳のコドモ、ワカモノ、オトナの区別ができ、姿勢やお尻の形で雌雄の識別も可能です。群れが川を渡る時や雪上を一列になって移動している時に、どんな年齢のサルが何頭いるのか数えてみましょう。

カモシカが一年中ほとんど同じところにいるのにくらべ、サルは季節移動をする場合があります。白山では、近年山麓の集落周辺にすみ着き畑に被害を出す一部の群れもいますが、多くの群れは秋の終わりから春までは主に斜面の下部の川沿いで過ごし、夏には美味しい芽吹きを求めて標高の高いところへ移動していきます。中には白山登山道の中宮道や加賀禅定道の標高2,000m付近まで上がっていく群れが知られています。観察舎から見える群れは夏にどこで生活しているかは分かっていませんが、移動している群れと思われる。観察舎が開いている期間は、季節的にちょうど見つけやすい標高にいることとなります。

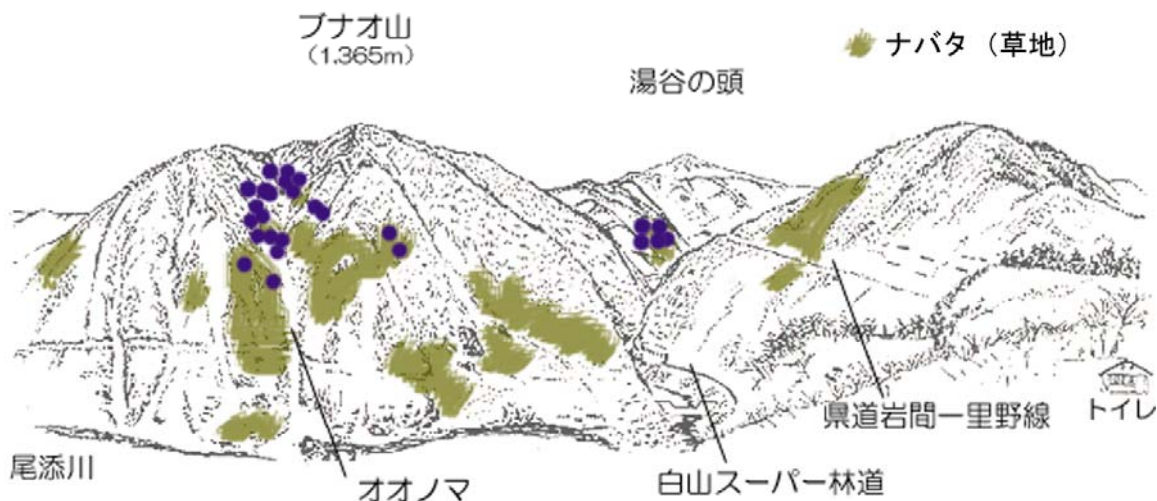


図3 ブナオ山観察舎からツキノワグマが観察された場所（2007年4月中旬～5月上旬）



ツキノワグマ

白山では冬には穴に入り眠っているクマですから、観察舎で見られるのは、普通は春に目覚めてからとなります。最近では4月中旬から5月の連休にかけて、比較的好く見られるようになりました。野生のクマが見られるというのは大変珍しいことで、全国的にもこのような施設から見られるところはないと思います。ブナオ山の南斜面はヒトがほとんど近づかない安全な場所だから姿を見せてくれるのです。白山でこの季節にクマがよく見つかる場所にはある一定の環境があることが分かっています。それは急斜面と岩場、針葉樹、草地の組み合わせです。昔から山麓の猟をする人には分かっていて、地名が付けられている場所も多くあります。

最近、捕獲したクマに電波発信機を装着し、それを追跡することで少しずつ新しいことが分かってきました。4年間山の中のほぼ同じところで生活していた発信機を着けた雌のクマが、2004年の大量出沒の年にその川の流域を下り直線距離で27km移動して平野部に近いところで捕獲されたことで、山の木の実が不作の年は普段とは異なる行動をとるクマがいることが分かりました。また2006年の9月に装着した2頭の雌グマを追跡したところ、ともに11月上旬にはそれまでいたところから、より奥地へ移動を始め、11月中旬以降にはその年の越冬場所付近に達していることが分かりました。

クマはカモシカのように縄張りを持ちません。サルのように毎年季節移動をするわけでもありません。餌となる草や木の実を求めて一頭で動き回り（子供がいるときは母子一緒に）、その季節の餌のあるところで過ごします。ブナオ山では春の若草の時期と夏の終わりから秋の木の実の実る時期が主な出沒の時と考えられますが、開館する11月の下旬以降は木の実の時期は終わりに近く、雪のない地面にいても見つけることは困難なので春先が見ることが出来る最もよい時となります。ブナが花を付けていれば木に登っているところが見られるかもしれません。野生のクマを見る数少ないチャンスを求めてゴールデンウィークのころに観察舎へ来て探してみませんか。

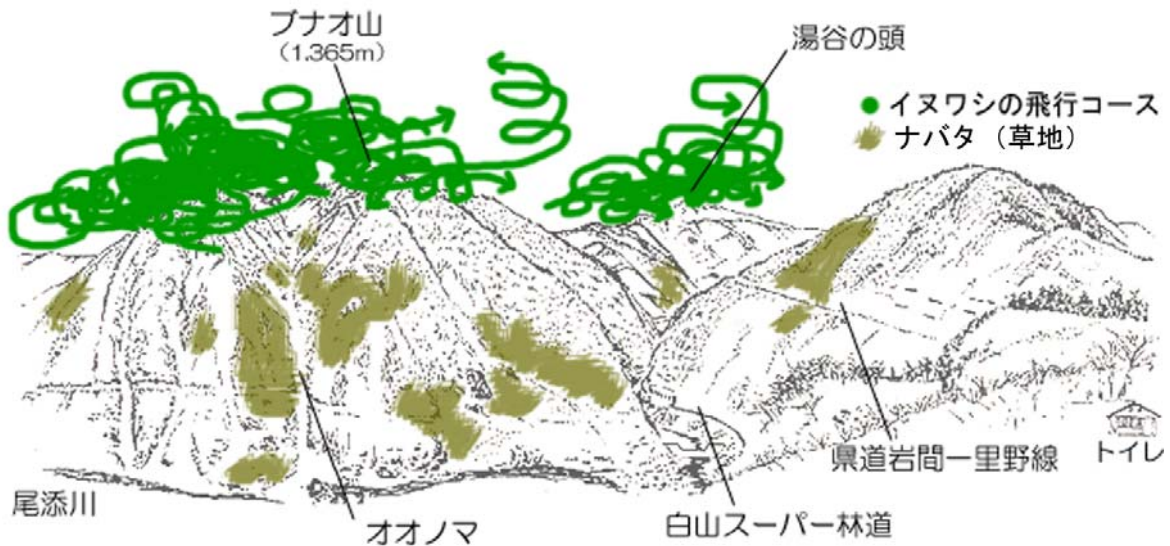


図4 ブナオ山観察舎からイヌワシが観察された場所（2006年11月20日～2007年5月5日）



イヌワシとクマタカ

石川県の県鳥イヌワシは、ブナオ山観察舎では比較的観察されやすい動物で、観察確率5位で26.3%となっています。また、希少なタカ類のクマタカも観察確率7位で17.7%となっています。また、観察確率は低いもののサシバやハヤブサといった希少な鳥類を比較的簡単に観察できるころは、全国的にも多くはありません。

大型の鳥類であるこれらイヌワシ・クマタカの2種は、白山地域ではある程度すみ分けがみられ、イヌワシは支流の大きな谷に、クマタカは本流沿いの林に分布しています。ブナオ山は幸いなことにどちらもいるところで、しかも白山地域の他地域にくらべてよく見える場所でもあります。実は観察舎が建設される前から、この場所はイヌワシの調査定点の一つとなっていて調査によく利用していました。イヌワシがブナオ山でよく見えることには理由があります。それはブナオ山の稜線がイヌワシの2つがいの縄張りの境界線になっていることが調査で分かり、どちらのつがいもこの場所へ出てくるからです。同時に2つがいが出現し合計4羽が見えたことも、今まで何度かあります。

イヌワシの繁殖期の始まりは晩秋で、ちょうど観察舎の開館したころはその時期にあたり、つがいの2羽でよく飛行します。つがい間で縄張りを主張したり、雄と雌で求愛を示したりする波を打つような目立つ飛行が多いのも11月から12月です。1月は巣づくりの時期で2月に産卵するので、繁殖がうまく進んでいけば雌は多くの時間、巣の中にいることになり、雄も11～12月のようには動かなくなり、みられる確率は下がります。2月になっても2羽で頻繁に出現するようであれば、その年の繁殖は中止ということになり、以後、繁殖している時よりはよく見えることになります。

見つけるときのポイントは、ブナオ山の稜線の近くの空を探すことです。林がバックではなかなか見つかりませんが、青空や雲を背景にすると見つかりやすくなります。また、時期によってよく止まる木があるので、職員に聞いてそこを望遠鏡でのぞいてみるのも一つの方法です。上空に出ることもよくあるイヌワシにくらべて、クマタカは林の木に止まっていることが多く空に出ることは少ないので見つけることは難しいかもしれません。しかし、どちらも縄張りを持ち一年中同じところにすんでいるので、根気よく探してみてください。開館中なら時間に関係なく現われます。



ブナオ山観察舎のキャラクター・かもちゃん

はくさん 山のまなび舎だより

ブナオ山 観察舎

5月5日まで開館

ブナオ山観察舎は今シーズンも昨年11月20日に開館しました。今年5月5日まで毎日開館しています。カモシカ、ニホンザル、イヌワシ、クマタカなど、厳冬を生きる野生動物を観察してみましよう。

参加者募集

かんじきハイキング

かんじきをはいて雪の森を歩き、自然観察や雪遊びをします。

日時：平成20年2月17日（日）10:00～15:00

会場：ブナオ山観察舎とその周辺

定員：30名（小学生以上、小学生は保護者同伴）

参加費：無料

申込み：電話で受付

その他：参加者にはお汁粉が振舞われます

野生どうぶつウォッチング

ブナオ山観察舎で動物のお話を聞いた後、白山一里野温泉スキー場ゴンドラで山頂に上がり、かんじきやスノーシューをはいてカモシカ、イヌワシの観察、ノウサギ、キツネ、テンなどの足跡を探します。

日時：平成20年3月16日（日）10:00～15:00

参加費：500円

定員：50名（小学生以上で、小学生は保護者同伴）

申込み：電話で受付

その他：参加者にはみそ汁や記念グッズを進呈

ブナオ山観察舎作品コンテスト

—ブナオ山でのあなたの感動をお寄せ下さい—

応募作品：これまでブナオ山観察舎で感動したこと、体験したこと、観察したことなどを表現した作文（詩・俳句・短歌含む）・絵・写真

応募締切：平成20年3月31日（月）

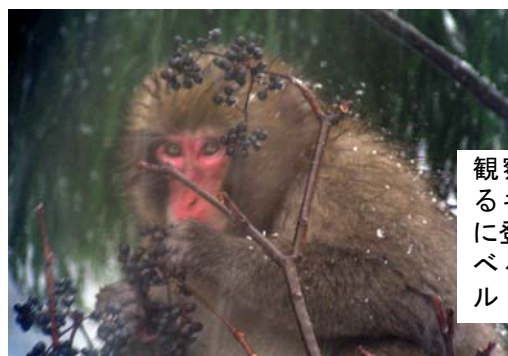
応募方法：応募用紙に必要事項を記入のうえ郵送

賞品：優秀作品には賞品を進呈します

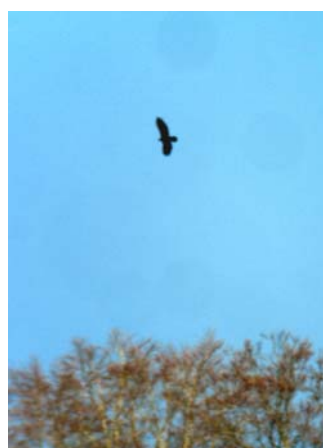
その他：応募作品はブナオ山観察舎や中宮展示館などで展示します



雪の上で寄り添って休むカモシカの母（手前）と子（12月17日、ブナオ山の斜面）



観察舎前にあるキハダの木に登り、実を食べるニホンザル（12月4日）



ブナオ山の稜線上を飛ぶイヌワシ（11月24日）

ブナオ山の斜面の木に止まったクマタカ（12月16日）



ミニ観察会も実施

かんじきをはいて雪の森を歩くミニ観察会も実施しています。野生動物を見つけたり、雪の様々な表情を観察したりします。12～4月の土、日、祝日の午前10時から午後3時までの間に1～2時間。観察舎職員がご案内します。団体の場合（20名以上）は事前に申込んで下さい。

申込み・問合せ先 石川県白山自然保護センター
〒923-2326 白山市木滑又4
TEL 0761-95-5321（3月1日から076-255-5321に変更）



白山まるごと体験教室

トチノキとトチモチ

「トチノキとトチモチ」は10月14日、白山市白峰の市ノ瀬ビジターセンターで親子ら31名が参加して行われ、白山麓の住民に受け継がれてきたトチモチ作りを体験しました。

午前中は白山自然ガイドボランティアの案内でチブリ尾根の登山道を歩き、トチノキとその実を観察しました。午後からネイチャープロジェクト白山の古谷浩一朗さんらの指導でトチノキの実の皮むき、灰によるあく抜きなどを体験しました。いずれも手間のかかる作業です。この後、うすときねを使ってトチモチつきに挑戦し、つきあがると、その場であんこを付けて試食、白山麓の味を満喫しました。

あく抜きの手間を実感



トチモチつきに挑戦する参加者

獣害防除に一役



竹ざおを使ってカキの実をもぐ

白山麓里山・奥山ワーキング

河原山カキもぎボランティア

「河原山カキもぎボランティア」は10月28日、白山市河原山町で51名が参加して行われました。サルやクマがカキの実を食べに人里へ侵入するのを防ぐのが狙い。初のプログラムに定員を上回る参加があり、関心の高さをうかがわせました。

参加者は「カキと獣害の関係」についての講義を聞いた後、「仏師ヶ野柿」で知られる河原山町で、カキのもぎ方を教わり、竹ざおでカキの実をもぎ取りました。カキの実のさわし方やジャムの作り方についても習いました。

県民白山講座

里山の暮らしと身近な生き物

スズメ、ツバメは環境の指標

「里山の暮らしと身近な生き物—白山麓旧鳥越村を例として—」は11月10日、白山市民交流センターで33名が参加して開かれました。

里山の変貌が生き物たちに与える影響について旧鳥越村で実施した調査結果が報告されました。土地利用、スズメとツバメ、チョウ類、カエル類について、白山自然保護センター職員や研究者が発表し、「スズメ、ツバメの繁殖状況は里山環境を知る指標になる」などの指摘がありました。参加者からは熱心な質問もあり、里山の暮らしと環境について理解を深めました。

白山自然ガイドボランティア

第3回研修講座

AEDの使用法学ぶ

白山自然ガイドボランティアの第3回研修講座は12月8日、金沢市の県立生涯学習センターで行われました。「野外での救急法」をテーマに、骨折や出血の応急手当のほか、心臓の働きを戻すのに有効なAED（自動体外式除細動器）の使い方についても実地訓練を受けました。

この後、2007年の活動を振り返り、翌年へ向けて意見交換しました。

<編集・谷野一道>

センターの動き (10月1日～12月31日)

- | | |
|--|---|
| <p>10. 2 白山商工会女性部案内
(市ノ瀬ビジターセンター)
いしかわ県民大学校講演 (金沢市)</p> <p>10.4-5 特別天然記念物カモシカ保護指導委員並びに
同保護行政担当者会議 (和歌山県高野町)</p> <p>10.12 金沢市米泉小学校案内
(市ノ瀬ビジターセンター)</p> <p>10.14 白山まるごと体験教室「トチノキとトチモチ」
(市ノ瀬ビジターセンター)</p> <p>10.19 福井県・石川県両県共同研究事業打合せ
(本庁舎)</p> <p>10.21 ボーイスカウト福井第21団案内
(市ノ瀬ビジターセンター)</p> <p>10.27 いしかわ自然学校まつり in 夕日寺 2007
(金沢市)</p> <p>10.28 白山麓里山・奥山ワーキング「河原山カキもぎ
ボランティア」 (本庁舎ほか)</p> <p>11. 1 いしかわ自然学校インストラクター養成課程
プログラム体験 (中宮展示館)</p> <p>11. 5 身体に障害のある女性のための県政学習バス
案内 (中宮展示館)</p> | <p>11. 6 市ノ瀬ビジターセンター冬季閉館 (市ノ瀬)</p> <p>11.10 県民白山講座「里山の暮らしと身近な生き物ー
白山麓旧鳥越村を例としてー」 (白山市)</p> <p>11.16 県政出前講座 (白山市)</p> <p>11.19 中宮展示館冬季閉館 (中宮)</p> <p>11.20 ブナオ山観察舎開館 (一里野)</p> <p>11.28 石川県博物館協議会実務担当者会議 (輪島市)
白山カモシカ保護地域特別調査第1回管理指
導委員会 (岐阜市)</p> <p>11.29-30 第10回自然系調査研究機関連絡会議
(福井市)</p> <p>11.30 白山国立公園大白山道(平瀬道)基本設計業務
に係る意見交換会 (白川村)</p> <p>12. 5 石川県立大学保全生態学講義 (野々市町)</p> <p>12. 8 白山自然ガイドボランティア研修講座第3回
(金沢市)</p> <p>12.11-12 たいへんねんて鳥獣害～イノシシ、シカたべん
け～北陸・東海・近畿鳥獣害防止対策セミナー
(金沢市)</p> <p>12.13 平成白山塾実行委員会 (白山市)</p> |
|--|---|

編集後記

ブナオ山観察舎の利用者数は、今シーズンで6万人を越えます。何回も来られて、職員と顔なじみになられている方もいらっしゃいますが、当観察舎が野生動物の自然のままの姿を観察できる施設として、全国的に珍しい施設であることが、まだまだ知られていないのが現状です。

カモシカ、ニホンザル、イヌワシ、クマタカなど多くの野生動物が生息する白山は、石川県民の誇りです。しかしながら、私たちは日常の生活の中でこの豊かな野生動物たちを見ることは、めったにありません。県鳥イヌワシが優雅に大空を舞う姿を眼にした県民はどのくらいいるのでしょうか。ブナオ山観察舎はこれらの野生動物の自然のままの姿を観察できる施設として全国に先駆けて建設されました。

白山自然保護センターでは、このブナオ山観察舎をもっと多くの方に利用していただき、白山の大自然の中でたくましく生きる動物の姿を観察する事によって得られる感動を体験していただきたいとの思いから、本号をブナオ山観察舎の特集号にしました。1968年から今日まで40年にわたってニホンザルを中心としてブナオ山の動物たちを観察されている伊澤先生、14年間観察舎に勤務された田中稔さんから貴重な体験談を寄せていただきました。お二人の体験談からブナオ山観察舎の魅力を感じ取っていただき、多くの方のご来館をお待ちしています。(徳田)

目 次

表紙 ブナオ山観察舎	徳田外治朗	1
ある日のブナオ山観察舎		2
ブナオ山で見た野生のドラマ	伊澤 紘生	4
ブナオ山観察舎で	田中 稔	6
ブナオ山の代表的な動物と観察のポイント	上馬 康生・野上 達也	8
はくさん 山のまなび舎だより	谷野 一道	14

発行日 2007年12月28日(年4回発行)
編集発行 石川県白山自然保護センター
〒920-2326 石川県白山市木滑ヌ4
TEL. 0761-95-5321 FAX. 0761-95-5323
URL <http://www.pref.ishikawa.jp/hakusan/>
E-mail hakusan@pref.ishikawa.lg.jp
印刷所 前田印刷株式会社

はくさん 第35巻 第3号(通巻145号)